

伝承文化の復活に取り組む大学と地域社会

— 中断した谷柏田植踊から学ぶもの —

菊地 和博

東北文教大学は南山形地区に位置している。この地区に中断して20年以上がたつ谷柏田植踊がある。この田植踊りをなんとか復活しようと、本学のボランティア学生と地域在住者が、唯一残されたVHSビデオを参考にしながら、平成28年6月中旬から練習を始めた。その成果は、大学祭が行われた10月9日に復活公演として披露することができた。地域在住者とともに、学生が復活活動に主体的に加わったということは希少な事例といえるだろう。今後これを継続していくためには多くの困難が予想されるが、それを可能にする有効な方策と努力が求められる。このたび田植踊り復活に関わった一人として、谷柏田植踊の起源伝承や由来、これまでの継承の歩み、地元小学生や中学生への伝承活動、地域社会においては果たしてきた役割などについて、きちんと整理して理解しておくことが大切であると考えた。その方法として、これまで記録された田植踊り関連資料の読み直しや、地元在住者への聞き取り調査などを行った。そこから導き出されたことがらを、本稿では、今後に学ぶべきこと、検証・検討を要すること、課題とすべきことなどとしてまとめてみた。さらに今後田植踊りをはじめとする伝承文化を継承していくために大切なこと、学校・大学と地域社会とのかかわり等について述べたものである。

はじめに

東北文教大学では、平成28年4月から山形県の「未来に伝える山形の宝」事業の助成を受けて、「東北文教大学・南山形地区創生プロジェクト委員会」が発足・スタートした。その内容は実践プラン1から実践プラン5までであるが、その第5プランに「谷柏田植踊の復活・継承」がある。

谷柏地区は、本学のある山形市片谷地を基点にすれば北西方面に位置する。そこには、20数年も中断している谷柏田植踊がある。本稿ではかつての谷柏田植踊とはどんなものであったか、残されたいくつかの記録をもとに丁寧にたどってみた。また立ち上げた創生プロジェクト活動の一環として、学生と地域在住者が一体となって田植踊り復活を試み、大学祭において初披露を行った。ここではその復活への歩みを振り返

りつつ、中断したかつての谷柏田植踊の実態とその復活・継承において大事なものは何か、という観点において論じた。

1. 谷柏地区の概況

『南山形郷土史探訪』や『山形県の地名』によれば^(注1)、谷柏村は本沢川南岸の扇状地、河岸段丘の湧水地帯に出来た村であり、清水端（すずばた）の水を中心とした中谷柏が古い集落だと伝えられる。ほぼ本沢川に沿って南西から北東方面へ上谷柏・中谷柏・台谷柏・下谷柏の順に須川近くまで細長く続く集落である。台谷柏は、宝暦2年（1752）の洪水で下谷柏の一部が高台の地に移った集落である。縄文時代の中谷柏遺跡、前田遺跡、弥生時代から奈良・平安時代までの沢田遺跡、石田遺跡、谷柏山古墳や条里制の遺構があり、古くから開発された地域であることがわかる。

この地域は広大な南山形地域のおよそ西北端に位置しており、弥生遺跡から発見された石包丁や古代の条里制などに象徴されるように、稲作農業が盛んな地域であった。近世は筵（むしろ）織りやイグサを原料としたゴザ織りの産地でもあり、豊表・ゴザは元治元年（1864）の「出羽国名所名産番付」に名を連ねている。谷柏河岸（船着場）は須川舟運の最上流（終点）にあり、上山藩の廻米を船積みしたところである。田植踊りはこの地区の下谷柏の集落に伝承されていた芸能である。

2. 田植踊りという芸能

田植踊りは、一般には年の始めの挨拶から始まり、その後は地主宅に駆けつけた大勢の田植え集団によって、苗植えから稲刈り・収穫までの一連の稲作農業の手順に沿って演技が展開される。最後は「来年また来る 田の神」などの言葉とともに暇乞いをして、全員が去っていくストーリーが描かれる。踊りの内容は、田植え作業がより舞踊化されて新たな振り付けが施され、著しく抽象的に表現される。「田遊び」の芸能などと比較して、農作業のリアル性はきわめて薄く風流芸能化が進んでいる。

かつて東北地方の田植踊りは、雪の降る1月15日の小正月に門付芸として各家々を巡った。早々とその年の豊作を祝う踊りを披露して神に豊作を約束してもらうという、いわゆる「予祝」の芸能として演じられてきた。主として冷害による飢饉に苦しんだ雪国東北地方特有の芸能である。

山形県を除く東北3県の1990年代の田植踊り団体数は、福島県108・宮城県24・岩手県115である^(注2)。当然ながら少子高齢が顕著な現代は、団体数が減少していることが考えられる。特に放射能汚染問題があった福島県はそうであろう。太平洋側では、福島・宮城・岩手の各県に濃密に分布しているが、青森県にはみられない^(注3)。日本海側では山形県のほぼ内陸部に分布しており、秋田県には伝承形跡がない^(注4)。

山形県内の田植踊りについては、平成27年現在における実施団体数は36である。山形市内に限った団体では、西山形・成沢・沼木・沖ノ原・山家・切畑の各地区団体があげられる。中断・休止中は若木・飯塚・くぬぎ沢・馬形などの団体である。なお、近隣には上山市の金生田植踊りがある。かつては下生居・沼田・甲石にもあった。時代

がさかのぼるほど、これ以上の団体が活動していたことは十分想定できる。

さて、ここで田植踊りの研究史についても、いくらか触れておかなければならない。東北における田植踊り研究は必ずしも深化しているとはいえず、調査報告的なものが多いのが現状である。まず岩手県においては、森口多里が地域ごとに特徴をもつ19団体を取り上げ、図解や写真を伴った詳細な説明を加えている（注5）。特徴的なのは、それらを基に田植踊りを①気仙・磐井型、②胆沢型、③和賀型、④中部型、⑤その他、に類型化している点であり、それが現在でも岩手県内の田植踊り考察の基本となっている。

次に多い福島県では、懸田弘訓が会津地方の早乙女踊りを含めて、起源論と系譜論の視点で県域全体の田植踊りについて見解を述べている（注6）。会津地方には早乙女踊りと称す田植踊り団体が約30継承されている。その起源はいずれも伝承で江戸時代初期の慶長年間とか寛永年間としているが、早過ぎて年代設定に無理があるという。他方、相馬・双葉地方には東日本大震災以前は約70もの団体が存在していたが、いずれも天明の飢饉後およそ1780年代以降に伝承されたとするものが多い。また、この地方の田植踊りは相対的に風流化が進んでいるとのことであるが、田植えのリアリティーさは一層見えにくくなっているということであろう。

宮城県においては、藩政期の史料が比較的多く残されており、それを基にした分析・考察が比較的多く行われてきた。その代表としては千葉雄市による研究で、『東藩事物起源』第一巻所収「仙台始元」や二代目船遊亭扇橋「奥のしをり」、二世十返舎一九「仙台年中行事大意」などから宮城県全般の田植踊りを検討しており、県内の田植踊りは蕪の紋を付けた蕪組が元祖との論を展開している（注7）。近年では、沼田愛は仙台藩が田植踊りを制限した「公儀御触国制禁」「定留」「秘蔵録」などのお触れ、主として文人が記した『夷艸』『仙台風』『浜菽』『仙府年中往来』などの藩内文献に検討を加え、田植踊りは宿守という町民出身者が担い手であったことや、田植踊りの芸能としての多様性と生業としての側面もあったことを提示しており（注8）、今後の議論の深まりが期待される。

山形県においては、田植踊り団体についての個別的な解説および市町村史の民俗分野での記載は少なくない。しかし、全県的見地では、丹野正が当時山形県文化財保護審議委員の立場で、教育委員会刊行物の中で記した「概説」が実態を把握するに最もふさわしい（注9）。丹野は山形県村山地方の田植踊りに2つの系統があることに触れ、テデ棒をつく「テデ系」とグロテスクな面をつける「弥十郎系」の存在を指摘している。テデ棒は大地に突き立てて、眠れる田の精霊を目覚めさせる鎮魂の呪具と見立てて、田植踊りが信仰の芸能であったと論じている。ただし、「弥十郎系」とはなんであるか、「テデ系」とはどのような歴史的関係性にあったかなどは論じていない。

また、丹野は田植踊りの本質として、田遊びが風流化したもの、田遊びを美しく舞踊化したものと述べている。田植踊りの名称もさまざま、えんぶり・春田打ち・白鍬踊り・サツキ踊りなどと同じであるという。これら、田遊びの元祖説、えんぶりや春田打ちなどとの同一論については大いに検討の余地があり、筆者も一定の考えを述べている（注10）。

以上、大急ぎで東北4県の田植踊りの研究軌跡を概観してみたが、今後東北全体を俯瞰した田植踊りの研究が待たれるところである。

3. 伊藤慶作氏の記録にみる谷柏田植踊

谷柏田植踊の記録の一つとして、「谷柏田植踊沿革」がある。下谷柏の伊藤慶作氏がノートに記したメモ風の覚え書きである(注11)。今からおよそ20年前に書かれたものである。同じく伊藤氏が後年記した「谷柏田植踊のルーツと現状」という記録も残されている(注12)。伊藤氏は昭和39年に谷柏田植踊保存会が結成された時の副会長であり、さらに昭和53年には保存会長になられた人である。谷柏田植踊の変遷・経緯を語るに相応しい方である。

伊藤氏の「谷柏田植踊沿革」・「谷柏田植踊のルーツと現状」は、ともに詳細な記録であり、かつての谷柏田植踊の姿を彷彿させる実に貴重な資料といえる。ここではこの2つを併用して丁寧に事実関係を追い、かつての田植踊りの実態に迫ってみたい。ただし両者の内容が異なっている部分もあり、特に年号などの数的なものは後に記した「谷柏田植踊のルーツと現状」の記載を採用した。氏自身が新たに記載するにあたって、以前の内容を確認し修正をはかったものと思われる。双方の文意を損なわない配慮をしつつ、独自の項目を立てて時系列的に整理・補足しながら記してみた。

(1)谷柏田植踊のルーツ

谷柏田植踊には伝承の記録がなく、師匠の口伝で受け継がれたので、先輩諸公の協力により、漸くそのルーツを明らかにすることができた。その発生地は上山市金生で約300年前から行われており、これが旧堀田村(上山市)金瓶に移り、約130年前に谷柏でも受け入れて伝承したようである。

(2)山口円蔵氏もたらした伝承芸能

谷柏台194-2b番地に在住していた慶応2年(1866)生まれの山口円蔵氏は、幼い時から芸事が好きで、明治8年(1875)10歳の頃に白鷹町の神楽師に入門し芸を習った。その後金瓶村の農家に百姓奉公に行き、金瓶の若者と一緒に当地の斎藤松太郎(松助か)師匠(当年35歳)から田植踊りを習った。こうして山口円蔵氏による田植踊りが谷柏にもたらされた。

(3)金瓶の斎藤松助(松太郎か)師匠の指導による田植踊り

明治30年、当年12歳から15歳の中川角吉、山口福蔵、横沢栄助、半田権助、小木曾文吉たちが揃い、金瓶の斎藤松助(松太郎か)師匠より習い始める。

源内棒 = 中川留吉・山口福蔵、中太鼓 = 小木曾文吉、早乙女 = 横沢栄吉ほか3名、唄・太鼓 = 半田権助、陰役(三味線・笛) = 伊藤金太郎・伊藤ナカ・伊藤甚作・会田弥平治・吉田三右エ門など。

このメンバーは狂言も習いレパートリーも広く、那須与一・定九郎・鳥さし舞・おかめなどを習得し、旧2月1日の甲箭神社の鎮守神の祭礼に神事舞として奉納した。一行は隣接の町や村の祭り・祝い事にも招かれ、谷柏田植踊はひっぱりだこで大変喜ばれた。日露戦争のときは花としていただいた奉賀料の一部を割いて軍事献金も行っている。

(4)山口円蔵氏の指導による田植踊り

山口円蔵氏は大正3年（1914）に台谷柏の若者衆（当時12歳から14歳）に対して、小川長三郎氏の土蔵の中で田植踊りを教え、踊りを行える若者が出揃った。

源内棒＝大宮繁一・大宮勇吉、中太鼓＝横沢貞太郎、早乙女＝小川浜太郎・会田弥之助・枝松金右エ門・伊藤繁一、太鼓・唄＝山川長七・伊藤善吉ほか数名。

田植踊りは古峰神社遷座式後に奉納した。村人の楽しみ娯楽として踊り神社に奉納した。昔はこうした踊りは村人達の楽しみ娯楽であった。筆者も幼い時に山形市豊烈神社の祭りに谷柏田植踊り一行が出演した時に見に行ったことが今でも思い出される。台谷柏の田植踊りも神社に奉納された。

(5)昭和4年の田植踊り習得

古老の田植踊り師匠は4人となり、下谷柏青年団団長丹野長五郎氏が団員の若者に田植踊りを伝承・保存していくよう相談・話し合いを行う。若者たちは賛同して、昭和4年に中川留吉・小木曾文吉の両師匠より田植踊りを習った。

源内棒＝中川菊蔵・大宮棒雄、中太鼓＝枝松長三郎、早乙女＝横沢新六・伊藤千代吉・横沢権左エ門・伊藤与吉、唄・太鼓＝丹野良策・保科助次郎ほか数名。

初舞台は金井小学校同窓会総会で披露し大喝采を受け、その後鎮守神や結婚披露宴等のお祝い事にも上演した。

(6)昭和6年以降の戦争時代と田植踊りの中断

満州事変に続いて支那事変勃発、日中戦争、満州開拓移民、昭和16年には太平洋戦争へと拡大し、男子は戦場へ送られて若者がいなくなり、残るは老人・女衆となった。谷柏田植踊りは中断の止む無きに至った。

(7)戦中での復活のきざし

昭和18年3月29日谷柏分教場での予防接種のあと、医師の横山忠一先生から谷柏田植踊りのことを聞かれたが、若者は戦地に赴き衣裳もばらばらになってしまったことを話したら、「今はすたれている谷柏田植踊りを以前のように盛んにして復活してはどうか。ちりちりになっている衣裳や道具を寄せ集める費用は自分がつ。不足分は買い足して陣容を整え、メンバーは下谷柏の娘だけでよい。何とか保存は出来ないだろうか」と熱心に説かれた。その後、横山先生は田植踊り保存のため金100円を寄付されたので下谷柏の老師匠中川留吉氏へ届け、中川氏は古い衣裳をまとめて世話人に渡した。

昭和18年4月、枝松圭蔵・吉田三右エ門の両氏と大字役員の協議で、田植踊り保存のための「郷土芸能保存会」を設立することになった。

(8)銃後の娘たちによる田植踊り

昭和19年3月27日、「郷土芸能保存会」の発会式が谷柏分校を会場に行われた。来賓は医師の横山忠一・荒井与助の両先生、歌人の結城哀草果先生、朝日新聞社大江部

長、古老師匠中川留吉・小木曾文吉氏であった。懇親会で古老師匠の舞う踊りを見て感嘆した結城哀草果先生は、次の短歌を作ってくれて祝ってくれた。

中川古老師匠には

人を救う医師二人を讃えたる 田植踊りの乙女子らおどる

小木曾古老師匠には

六十にあまる翁の舞う姿 乙女に似たる若きしなかも

昭和19年4月、横山忠一先生は谷柏分校で村人のトラホーム検診をしてくれたあと、田植踊り復活の話を持ち出された。18年3月に要望したように、メンバーは下谷柏部落の娘だけで出来ればよいと話した。

下谷柏に田植踊りのベテラン師匠中川留吉氏の孫娘に中川とも子さんがいた。彼女は田植踊りが好きなこともあり、友人を誘って祖父の手ほどきを受け、田植踊りを習い始めた。こうして下谷柏の若い娘たちのメンバーで練習が始まった。同年5月に谷柏分校の2階教室で娘たちによる田植踊りが初めて披露された。踊りは参会者の絶賛を受け、横山先生も大変喜んで、踊り手たちは激励の言葉をいただいた。その後も一所懸命に稽古に励み、山形陸軍病院や老人ホームの慰問を行い大いに喜ばれた。

(9)戦後と婦人たちの田植踊り復興

しかし戦争は熾烈となり銃後の守りも険しく、芸能を顧みる余裕などは全くなくなってしまった。ついに昭和20年8月15日終戦となり、若者の多くは戦場の露と消えて帰らず、古老師匠も小木曾文吉氏のみとなった。この苦境から立ち上がったのは婦人たちであった。昭和24年婦人班長丹野タマエさん・副班長横沢ミサさんの両者が古老師匠と話し合い、今後は女手で谷柏田植踊りを継承していきたいので教えてほしい旨を相談した。班員でも協議した結果20数名の希望者が出そろった。古老師匠小木曾文吉氏から習い受けた。

源内棒＝半田ヒサノ・中川トモ子、中太鼓＝半田トエ、早乙女＝横沢ソヨ・会田よしえ・伊藤久江・小木曾モリエ、太鼓＝伊藤トヤ・伊藤ミヨ・富田ヨシノ、唄＝荒井ナツ・横沢ムメヨ・丹野ノブエ・横沢ツルエ・横沢スヨ

晴れの舞台は南山形婦人会総会であった。その後各地からの出演依頼も多いので、横沢善太郎氏を差図人とした。

昭和29年山形市合併祝賀会パレードには谷柏田植踊寄せ太鼓が参加し、車上から打ち寄せる迫力ある太鼓に市民は惜しみない拍手を送った。さらに農協主催の早苗振大会、地区祭りなどにも出演した。

昭和37年山形市在住の民俗研究家丹野正先生は田植踊りを次のように解説してくれた。

田植踊りは稲作の豊作をもたらす「まじない」の踊りで、稲作の仕事がよどみなく運ぶように演じられている。谷柏田植踊は村の若者たちによって行われてきたが、戦後村の若者が少なくなり絶えようとしたとき、村の婦人達が立ち上がりこれを引き継ぎ今日に至ったことは大きな特色である。

丹野先生は谷柏田植踊の伝承・保存方を要望し、次のうた（短歌）を贈って励ましている。

若者の捨てし踊りをおみ（女）ながら 拾い育ててすこやかにあり

(10)谷柏田植踊の保存会結成へ

谷柏田植踊一行は、昭和39年4月30日米沢市民会館で開催された山形県芸能公演会に出演した。その夜、公民館で丹野正先生と松田さんを招待して反省会・懇親会を催した。また、同年8月30日第1回山形市総合文化祭に出演、9月1日会田よしえさん宅にて、来賓に丹野先生と部落会長会田佐七氏を招待し懇親会を行う。そこで丹野先生は、谷柏田植踊を山形市の無形民俗文化財に指定してもよいが、まずは保存会を作ることが先であることを話された。演技者たちは部落会長にぜひ保存会を作ってもらいたいことをその場で要望した。そこで部落会長は、10月17日に総会を開いて保存会結成を提案し、部落民の賛同をもらった。さっそく保存会結成のための契約書を作成し役員も選出された。役員は以下のとおりである。

<谷柏田植踊保存会役員>

会長 横沢善太郎 副会長 伊藤慶作

会計 岩口吉郎 幹事 中川トモ子 半田ヒサノ

参与 部落役員

(11)多くの田植踊り出演依頼

昭和41年2月11日山形県民会館にて芸能大会が行われ、それに谷柏田植踊が出演。同じく、昭和42年3月12日山形市民俗芸能大会に出演。その際に丹野正先生は谷柏田植踊について解説をされた。山形県には数十組の田植踊があるが、山形市に伝わるものだけでも十一組におよんでいること。その中でも谷柏田植踊は戦前村の若者たちによって行われてきたものが、戦後は村の婦人たちが立ち上がってこれを引き継いで今日に至っていること。そういう意味で大変特色をもった田植踊りであることを紹介した。

田植踊りのメンバーも練習に励み出演依頼も多くなった。昭和43年8月8日山形市民会館でのNHKふるさと唄祭りに出演。宮田輝アナウンサーの司会進行のもと、谷柏田植踊の演技には歓声が上がった。12月1日南陽市民会館での山形県芸術祭に出演。またNHK録音取材について宮城放送局の依頼で演技を披露。そこでは、早船きよ作家が谷柏田植踊の沿革と伝承を聞き取りされた。そのほか、農水産祭、米沢市・上山市の各市民会館で催された県や市の行事にも出演している。

(12)若手婦人（若妻）の後継者育成へ

素晴らしい民俗芸能として高く評価されている谷柏田植踊も、後継者育成の必要に迫られた。昭和46年9月14日、丹野正先生の講演をお聞きし、部落の若手婦人（若妻）たちへの田植踊りへの参加依頼を始めることにした。その後部落会長の伊藤慶作氏は、村の若手婦人（若妻）の方々に家庭訪問をして協力を依頼して回った。その結果、昭和47年7月8日若手婦人たち20数名のメンバーが揃うことになった。

源内棒＝横沢はる子・小木曾しずえ、中太鼓＝横沢叡子・小木曾待子、早乙女＝伊藤きよ子・伊藤富美・横沢トメノ・岩口トヨ子、太鼓＝丹野良子、唄＝高橋サヨ・高橋マサエ・金沢ミツノ

このメンバーの初舞台は南松原盆踊り大会である。その後、昭和48年7月25日山形市民会館落成祝賀会に出演。昭和51年11月28日上山市民会館での山形県芸術文化祭に出演。昭和52年7月16日酒田市民会館友好出演する。そのほかには、山形県立山形東高等学校送別会・山形市立第九中学校での全国学校放送研修会など、各種会合での出演依頼が続いた。

(13)新役員選出

昭和53年3月2日谷柏田植踊保存会長であった横沢善太郎氏が永眠された。それにともなって、保存会の役員改選が行われて以下の新メンバーがスタートした。

会長 伊藤慶作 副会長 岩口吉郎（会計兼務）
幹事 半田ヒサノ 中川トモ子 小木曾シズエ 伊藤きよ子
参与 大字役員全員

同年4月20日、NHK番組「おぼんです」の放送のため、午後6時30分に録画撮り出演した。

(14)小学生への継承

昭和54年10月23日、南山形小学校6年生担任の今田範子先生、PTA役員の吉田吉助氏が保存会長伊藤慶作氏宅を訪問。地元の郷土芸能である田植踊りを生徒に踊らせてみたいので教えてほしいとのお願いがなされた。保存会としても、子どもたちへ教えたり継承してほしいと考えていたところなのでよろしくと伝え、すぐに話しがまとまった。10月30日、学校では今田先生はじめ金沢昭寿・遠藤美紀子の各先生の協力により、さっそく生徒へ田植踊りの希望者を募ったところ、児童会の中から16名が集まった。

源内棒＝枝松淳雄・中川智夫、中太鼓＝吉田兼治、早乙女＝杉浦朋子・本沢千奈美・井上淳子・森口和恵、太鼓＝伊藤達也・高橋正樹、唄＝山口きよ子・須藤きよ子・小笠原みほ 担当：今田範子先生・遠藤淳一先生・遠藤美紀子先生

踊りの練習は、下谷柏公民館で午後7時から数日間にわたって続けられたが、児童たちの習得力は素晴らしいものであった。晴れの舞台も近づいてきた頃、子どもたち用の衣裳を作る必要に迫られてきたとき、枝松淳雄・中川智夫・吉田兼治君たちの母親たちが夜なべをして衣裳を整えて下さり、さらに小道具まで作製してくれたのには全く感謝のほかはない。その晴れ着をまとい学校の学芸会に出演し、さらに南山形公民館落成の祝賀会にも出演してくれた。大好評を博し人気も上々であった。それ以降は毎年南山形地区文化祭で披露している。

(15)武田幸恵さん「全国作文コンクール」で特選・教科書採択

中谷柏の武田幸恵さんは、昭和60年中学2年生のときに、南山形小学校6年生で体験した早乙女役をもとに、「谷柏田植踊について」と題する作文を書いた。それが文部省・各都道府県教育委員会後援の「全国児童生徒作品コンクール」に応募してみごと特選（日本児童教育振興財団賞）に輝いた。この作文は中学校2年生用国語教科書にも採択され全国的な反響をよび、東京・大阪・名古屋の出版社より、その保存と伝承についての問い合わせや取材がたくさん寄せられた。その後、昭和61年に山形市民会館にて出版記念発表として、武田幸恵さんはじめ16名が田植踊りの披露を行った。

(16)第九中学校での取り組みと今後について

昭和61年子どもたちに寄せ太鼓を教え、文化祭で出演披露した。平成4年3月12日、山形市立第九中学校の3年生を送る会「未来にはばたく集い」で田植踊りと寄せ太鼓を教える。平成6年5月2日、山形市立第九中学校「創立二十周年記念式典」に出演。田植踊りとともに、寄せ太鼓については大太鼓10・小太鼓40という大がかりな生徒会企画であり、盛大な太鼓打ちであった。平成9年「未来にはばたく集い」では、2年生男女30数名による寄せ太鼓を轟かせ、体育館は盛大な拍手につつまれた。

寄せ太鼓は踊りに入る前に2人で轟きわたらせ、その後の踊りに入るもの。山形市に現存する11組の田植踊りの中で寄せ太鼓があるのは谷柏だけである。折からの「和太鼓ブーム」もあって、太鼓の数を増やして盛大な谷柏寄せ太鼓とし、保存に力を入れ子どもたちに継承されている現状である。

谷柏田植踊りが子どもに継承されてから17年をむかえ、教え習った子どもの数は百数十名となっている。庶民文化財を伝承し、また後継者育成等に力をいれているところである。今後もこの踊りと太鼓を子どもたちとともに地区民挙げて継承することとし、婦人の方々と一緒になって頑張っている次第である。

(17)谷柏田植踊の構成

田植踊りは、稲作の仕事がよどみなく田植から収穫まで運ぶように「まじない」の舞踊なので、歌詞も昔の言葉でお正月から田ノ神とお別れするまで歌われている。

（歌詞は別紙にて）

寄せ太鼓＝大太鼓1、小太鼓1

<演目>

- ① お正月＝年頭のめでたの祝い
- ② 思う人＝代苗の上出来を喜びながら苗引き
- ③ 十七返え＝ほめ言葉が出ると返し言葉と同時に踊る
- ④ そうりのや＝稲穂の上出来と豊作を喜ぶ
- ⑤ やんさのさ＝収穫から初摺り
- ⑥ つんばくら＝米の精製
- ⑦ まいよのえ＝米搗きの様子
- ⑧ あんがりはか＝全作業を終わってお田の神とお暇乞い
ほめ言葉
返す言葉

<役付>

- ① 源内棒 2人 = 苗代から苗を運び田植縄を張る姿 (別名「テイテイシキ」)
- ② 中太鼓 1人 = 苗を田面に配り作業者を表す形
- ③ 早乙女 4人 = 女装して花笠をかぶり、扇子・びんざさら・箸 2本をもつ
- ④ 囃子 2人 = 歌をうたう
- ⑤ 横笛 2人
- ⑥ 陰太鼓 2人 = 中太鼓が低いので陰で中太鼓の打ち手に合わせて太鼓を打つ

4. 武田幸恵氏の記録による谷柏田植踊

これまでの伊藤慶作氏の2つの記録にも登場する武田幸恵氏の記録(作文)「谷柏田植踊り」を以下に全文紹介する(注13)。武田氏は6年生で早乙女役を経験しており、その体験を通してみた谷柏田植踊の姿がよく描写されていて参考になる。

わたしの家は、山形市大字谷柏というところにある。谷柏は、上、中、台、下からなり、編笠の産地としても知られている。その下谷柏に伝わる田植踊りは、江戸時代からの民俗芸能だ。その民俗芸能を絶やさないために、6年前から小学6年生を集めて毎年練習をさせている。習った踊りは、文化祭などで発表されるのだ。教えてくれる先生は、地域のおばちゃんたちで、おばちゃんたちは、「谷柏田植踊保存会」を結成している。

小学校6年生の時のことである。わたしは、11月3日の文化の日に行われる地域の文化祭に参加するために、小学校の体育館に来ていた。

踊る人が集まり、体育館の隣の図工室を借りて大がかりな支度が始まった。手伝いに来ているお母さんがたに着せてもらう。わたしは「早乙女」という役なので、笠をかぶり扇子を持つ。化粧もさせられた。みんな真っ赤な口紅をぬられて、見慣れない顔になったので、必死で顔を隠した。

支度も終わり、舞台のそでで待機していると、言いようのない緊張感が襲ってくる。自分の鼓動が聞こえるようだ。つま先から頭のとっぺんまで、ドキン、ドキンと脈打っている。周りのことなど目に入らなくなり、昨日おさらいしたことが頭の中を駆けめぐる。前の人のおし物が終わり、いよいよ出発だ。幕が下りた舞台に並ぶ。幕の向こうの客席は、大きくどよめいていた。たくさんの人が入っている！—そう思っただけで、足の震えが止まらなかった。

幕が静かに上がった。前列にいる3人の「テーテツキ」と呼ばれる踊り手が、ゆっくり回りながら田植えの説明をする。説明といっても、古い言葉を使うのでよく意味がわからない。それが終わると、舞台の下にいた歌い手たちが一斉に歌いだし、笛や太鼓が鳴り出す。舞台では、テーテツキに早乙女5人が加わり、8人全員が踊る。わたしは、扇子を持って一生懸命に踊る。足の震えがまだ止まらない。もう無我夢中だ。

歌が止まった。と同時に、踊っていた人もピタッと止まる。静かに幕が下りる。終わったのだ！お客さんが、舞台に向かっておひねりを投げってくる。これは毎年のことだが、とてもうれしい。わたしたちの踊りが、認められたことになる。体育館に拍手が響き渡る。そして、わたしは舞台を下りた。

この田植踊りは、踊りや手足のさまざまな所作によって、田植えから稲の刈り取りまでの仕事がよく運んでいくさまを演じるもので、豊作を招こうとする呪術の踊りだ。つまり、稲の順調な生育の一生を演じて、そのように豊かに稲の穂が実るようにまじないを行うとともに、田の神の魂をしずめようとするのが、田植踊りの本来の目的なのだ。ところが、江戸時代の中ごろから、時代の流れの変化につれて田の神の信仰という本来の目的が薄れてきた。そして、そのかわりに目で見えて楽しむ観賞用の優美な踊りに変わって、今日に引き継がれるようになったのだ。こうなった直接の原因は、生活が豊かになったからだと思う。江戸時代中期になると、耕地面積は安土桃山時代の2倍以上にも増えた。農機具も改良され、備中ぐわや千歯こきなど、便利な農具が用いられるようになった。こうして生活が豊かになってきたので、信仰などをする必要がなくなったのだ、とわたしは思う。

谷柏は、古くから米作りが盛んだった。土器なども、たくさん出土している。しかし谷柏田植踊の歴史は、わりに新しい。百年くらい前に、近くの「金瓶」という村から伝わったものだ。斎藤松助さんという人が教えてくれたらしい。伝承経路は、金生から成沢へ、成沢から金瓶へ、金瓶から下谷柏へという順序だ。こうして、田植踊りがあるところは、山形市だけでも11組におよんでいる。

さすが、米の産地山形だ。その中でも、谷柏田植踊は特色のあるものである。

「ハァー おんもう（思う）人と苗引くならば 一万刈りも一ひいき（引き）ー。」
 ーこれは、「谷柏田植踊り唄」の一節だ。ひそかに思いを寄せ、慕っている人と一緒に、苗代で苗を引くと、うれしくてたちまちのうちにたくさんの苗を引いてしまうという意味である。とても素朴で、純粹な感じがする。谷柏田植踊り唄は、こうした田のできごとや、田への思いを歌いあげたものだ。曲はたくさんあるが、その中の「お正月」などは、田植えとはあまり関係がなく、おめでたい正月の様子が歌われている。きっと、その年は豊作だったのだろう。「恵比寿・大黒やんが 酌に 立ててなごんうかの舞の御酒盛り」ー「お正月」の三番の節である。意味はよくわからないが、恵比寿様や大黒様は、福德の神だから、おめでたい。そのおめでたい神様が宴会をするのだから、昔の正月は、とてもおめでたいのだろう。

わたしは、当時から一つの疑問があった。それは、「谷柏田植踊保存会」には、男の人が一人もいないということだ。教えてくれるのはおばあちゃんだけで、おじいちゃんも一人もいない。テーテツキや太鼓は、普通男の人がやる役だ。それも全部、おばあちゃんが教えてくれる。どうしてだろう。何か、理由があるのだろうか。そこでわたしは、村の歴史が載っている本を探して調べてみた。そこには、こう書いてあった。「若者の捨てし踊りを おみながら 拾い育てて健やかにあり」ー谷柏田植踊も、本来は村の若者たちによって行われてきたものですが、戦後、若者たちがこれを捨て、絶えようとした時、村の婦人たちが立ち上がってこれを引き継ぎ、今日にいたっています。」これを読んだ時、わたしは驚いてしまった。「村の婦人たち」とは、あのおばあちゃんたちのことだ。あの、おばあちゃんたちに、こんな過去があったなんて…。あんなにすばらしい踊りが絶えてしまわなくてよかった。踊りを引き継いでくれたおばあちゃんたちに対する感謝の気持ちでいっぱいだ。この地域に生まれて本当によかったと思う。

5. 「田植唄」記録からみる谷柏田植踊

谷柏田植踊保存会が昭和43年に「成沢田植踊唄を写す」として田植唄を記録したものがあ
る(注14)。曲目は以下のとおりである。

- (1)お正月(口上と唄) (2)あさやはか(口上と唄) (3)思う人(口上と唄) (4)十七がえ(唄のみ) (5)そうりのや(口上と唄) (6)やんさのさ(口上と唄) (7)つんばくら(口上と唄) (8)まいよのえ(口上と唄) (9)金山(口上と唄) (10)あんがりはか(口上と唄)

以上の10曲目の中で、「十七がえ」をのぞいてすべてに口上と唄がともなっている。口上は「源内棒」と「中太鼓」の前列踊り手3人がそれぞれ大声で述べるものである。唄は、踊り手の脇で数人が踊りに合わせて歌いあげるものである。ここでは、「(1)お正月」の曲目の口上と唄を書き写してみる。

1. 口上「源内棒」(1人目)

えーとこな 御亭様 お家(うち)にあがるや御免なされ 明(あ)きの方からお田植が参った 千秋万世先ず以って御目出度(おめでとう) 御座る

2. 口上「中太鼓」

然れば これの御旦那様には好いしう日取りとあって お田植を成さる時はおいなさる

3. 口上「源内棒」(2人目)

見れば代の掻き様も結構さ 練り練り練んばりとして好い代なり 苗を見れば上々の上苗 投げれば打ったつ様な苗なり 頭の一水口よりお初めしどのこうさのこうやなぎづたまで 十六七のおうなすかたびらにおうじらすがぶつついた如くに 苗元を取ってばらばらとやってくれまいかなあ

<唄>

1. お正月のやんが 御目出度御座るなごん は一祝い立てた門松 ヨイトコラサー
2. しろや がんねのやんが 銚子盃なごん 祝い申すぞ御亭様
3. 恵比寿大黒やんが 酌に立ててなごん うかの舞の御酒盛

6. 平成28年度谷柏田植踊復活へのあゆみ

(1)動き始めた地域在住者と学生たち

本稿の「はじめに」に記したように、「未来に伝える山形の宝」事業の「実践プラン5」に谷柏田植踊の復活・継承活動が盛り込まれた。そのプランに所属したプロジェクト委員および協力委員は次のメンバーである。

①東海林明美氏 ②設楽信一氏 ③福井隆夫氏 ④丹野裕志氏 ⑤石井慶市氏 ⑥高瀬勲氏 さらに、プロジェクト委員以外でこの田植踊りチームに加わってくれた地域在住者は、①伊藤哲雄氏 ②伊藤香織氏 ③大宮靖子氏 ④佐々木和雄氏 ⑤黒坂美恵子氏 ⑥中村京子氏 ⑦渡辺千矢子氏 ⑧渡辺正江氏である。南山形の地域在住者は14名にのぼった。

またボランティア学生は以下の6人である。

- ①崔 睿恩（総合文化学科2年）
- ②草刈友紀（同上）
- ③今野靖子（同上）
- ④佐藤綾夏（同上）
- ⑤安孫子茉由（総合文化学科1年）
- ⑥佐藤みき（同上）

(2)活動の開始

谷柏田植踊が中断してから20数年経過しているが、幸いに保存会長の役職はずっと存続していた。現在も下谷柏地区に在住する枝松昭雄氏（元山形市議会議員）が保存会長である。プロジェクト委員で田植踊りチームリーダーの東海林明美氏と同じく委員の丹野裕志氏は、田植踊りの復活への取り組みを開始するにあたり、保存会長の枝松氏にそのことのご理解とご了承を得るため自宅を訪れた。幸いに枝松氏は心良くご了承し励まして下さったので、いよいよ取り組みへの動きが加速した。最初に取り組みが開始されたのは平成28年6月であった。そのとき取り組んだもの、話し合われた内容を簡潔に以下に記す。

①日 時 6月16日（木）17：40～ 東北文教大学 333教室

②内 容

VHSビデオ「谷柏田植踊」を参加者全員で観賞する。演技内容・役割等必要人員を確認した。

③役割分担（学生はビデオを見ながら希望する役割をその場で選ぶ）

- ・寄せ鼓…東海林明美氏・中村京子氏・渡辺千矢子氏・渡辺正江氏（地域在住者）
- ・唄い手…福井隆夫氏・高瀬 勲氏・石井慶市・丹野裕志・伊藤哲雄氏（地域在住者）
- ・太 鼓…設楽信一氏・佐々木和雄氏・黒坂美恵子氏（地域在住者）
- ・踊り手
 - 中太鼓…佐藤綾夏（学生）
 - 源内棒…草刈友紀・今野靖子（学生）
 - 早乙女…崔 睿恩・安孫子茉由（学生）
 - 鈴木 純氏（子ども学科教員）・金子香織氏（大学職員）
 - 伊藤香織氏・大宮靖子氏（地域在住者）

④衣裳・道具等の確認（会場移動）

会議終了後、下谷柏公民館に移動して、谷柏田植踊衣裳と用具類の確認作業を行った。その結果、紛失や損傷がほとんどなく、そのまま使用できるように揃っていたのは幸運であった。

このようにして第1回目の会合がもたれて、田植踊り復活へのスタート地点に立った。しかし決定的な問題は、踊りにしろ唄にしろ、手取り足取りの実践的指導者がまったくいない状態のなか、VHSビデオ1本が何よりも頼りとされたことである。したがって、このマザー1本をDVDにおこし、さらにその複製版をほぼ人数分作製したのである。

この作業にあたっては、伊藤香織氏に大変ご尽力をいただいた。また伊藤氏は唄についても楽譜におこして下さるといのご難儀な作業もお引き受けいただき、とても歌

いやすくなつたのである。このようにして、初期段階は複製版や楽譜を各自宅に持ち帰り個人レッスンを積み重ねることを基本とし、合同練習時には全員で内容の確認と、踊り・唄・太鼓の合わせ作業を繰り返すことになった。当面は4演目中の1演目「お正月」を確実にマスターすることを目標にした。

(3)練習の積み重ね

これまでの練習を振り返ると、寄せ太鼓・踊り・歌のパートごと練習および合同練習は次のような日数を重ねた（下線部は合同練習日）。

○7月12日(火) 学生練習(大学) ○7月15日(金) 寄せ太鼓練習(下谷柏公民館) ○7月20日(水) 関係者打ち合わせ(大学) ○7月22日(金) 寄せ太鼓練習(下谷柏公民館) ○7月26日(火) 学生練習(大学) ○7月28日(木) 合同練習(下谷柏公民館) ○7月29日(金) 寄せ太鼓練習(下谷柏公民館) ○8月2日(火) 学生練習(大学) ○8月3日(水) 寄せ太鼓練習(下谷柏公民館) ○8月5日(金) 寄せ太鼓練習(下谷柏公民館) ○8月8日(月) 学生練習(大学) ○8月10日(水) 歌練習(下谷柏公民館) ○8月18日(木) 歌練習(下谷柏公民館) ○8月25日(木) 合同練習(下谷柏公民館) ○8月31日(水) 歌および寄せ太鼓練習(下谷柏公民館) ○9月5日(月) 学生練習(大学) ○9月8日(木) 合同練習(下谷柏公民館) ○9月9日(金) 寄せ太鼓練習(下谷柏公民館) ○9月13日(火) 学生練習(大学) ○9月14日(水) 歌練習(下谷柏公民館) ○9月21日(水) 合同練習(下谷柏公民館) ○9月27日(火) 歌練習(下谷柏公民館) ○9月28日(水) 着付け訓練(下谷柏公民館) ○9月29日(木) 寄せ太鼓練習(下谷柏公民館) ○10月6日(木) 合同練習(下谷柏公民館) ○10月7日(金) 寄せ太鼓練習(下谷柏公民館) ○10月14日(金) 寄せ太鼓練習(下谷柏公民館) ○10月21日(金) 寄せ太鼓練習(下谷柏公民館) ○10月26日(水) 合同練習(下谷柏公民館) ○10月28日(金) 寄せ太鼓練習(下谷柏公民館)

以上を振り返ってみるに、10月28日まで各パートでは、寄せ太鼓チーム13回、学生踊りチーム5回、歌チーム5回を数える。下線部の合同練習6回を合わせると、約4か月半で各パート練習は十数回に及んでいることになる。陰太鼓チームは合同練習時に合わせて訓練を重ねた。練習のほか打ち合わせ会や着付け訓練も加わる。寄せ太鼓チームは段ボールを叩きながら練習を重ねた。この期間、学生は夏休みをはさんでいたが、いとわず登校してよく練習に励んだ。

(4)復活発表の場

[第1回目発表]

平成28年10月9日(日)、東北文教祭の2日目に行った。午前11時30分から12時までの約30分の時間帯で、大学の中庭で芝生の上を舞台として実演した。これが事実上の復活初公演であった。出演者は以下のとおりである。

- ・寄せ太鼓…東海林明美氏・中村京子氏・渡辺千矢子氏・渡辺正江氏(地域在住者)
- ・唄い手…福井隆夫氏・高瀬 勲氏・石井慶市・丹野裕志・伊藤哲雄氏(地域在住者)
- ・陰太鼓…設楽信一氏・佐々木和雄氏・黒坂美恵子氏(地域在住者)
- ・踊り手

中太鼓…佐藤綾夏（学生）
源内棒…草刈友紀・今野靖子（学生）
早乙女…崔 睿恩・安孫子茉由・佐藤みき（学生）、鈴木 純氏（子ども学科教員）
伊藤香織氏（地域在住者）

いまだ演目「お正月」のみの公演であり、「寄せ太鼓」を含めても時間的にややもの足りないこと、1演目を終えたのちすぐにまた同じ演目を繰り返すのでは単調すぎるなどから、演目との間に谷柏田植踊とその復活までの歩みを解説と出演者一人ひとりの紹介も行った。さらに「長谷堂城山太鼓」の和太鼓チームの応援演奏をいたしながら、公演全体の演出に工夫をこらし持ち時間をこなした。

[第2回目発表]

平成28年10月15日（土）、山形グランドホテルを会場とする村山民俗学会30周年記念祝賀会の席上、アトラクションの部として午後3時15分から30分までの間に披露した。このときは時間の関係上、「寄せ太鼓」を含めて1演目を2回連続して行った。むろん演目の間には解説と出演者の紹介も挟んだ。このときの出演者は以下のとおりである。

- ・寄せ太鼓…東海林明美氏・中村京子氏・渡辺千矢子氏・渡辺正江氏
- ・唄い手…福井隆夫氏・高瀬 勲氏・石井慶市・丹野裕志・伊藤哲雄氏
- ・陰太鼓…佐々木和雄氏・黒坂美恵子氏
- ・踊り手
中太鼓…佐藤綾夏
源内棒…草刈友紀・今野靖子
早乙女…崔 睿恩・安孫子茉由・佐藤みき・金子香織氏・伊藤香織氏

[第3回目発表]

平成28年10月30日（日）、南山形地区文化祭で午後1時25分から15分間披露した。この発表では、学生の「源内棒」「中太鼓」「早乙女」の各役を入れ替えてみた。いろいろな役割を覚えてマスターできるようになってほしいこと、欠席者が出たときの代替役が出来るようになってきていること、などを考慮したからである。このときの出演者は以下のとおりである。

- ・寄せ太鼓…東海林明美氏・中村京子氏・渡辺千矢子氏・渡辺正江氏
- ・唄い手…福井隆夫氏・高瀬 勲氏・石井慶市・丹野裕志・伊藤哲雄氏
- ・陰太鼓…設楽信一氏・佐々木和雄氏・黒坂美恵子氏
- ・踊り手
中太鼓…崔 睿恩
源内棒…安孫子茉由・佐藤みき
早乙女…佐藤綾夏・草刈友紀・金子香織氏・伊藤香織氏・大宮靖子氏

なお、早乙女の演技は着物を着用するが、披露のたびにその着付け作業が必ず必要とされた。それは誰でもが出来るというわけではなく、着付けの技術を持っている方をお願いするほかない。そのため、このたびの3回の披露では特別に地域在住者である中川藤子氏に直接会場にお越しただいて、手間のかかる着付け作業をお願いし、

その結果発表披露ができたことを記しておかなければならない。

7. 考察

先に記した伊藤慶作氏の記録「谷柏田植踊沿革」と「谷柏田植踊のルーツと現状」、武田幸恵氏の記録「谷柏田植踊」(作文)、また記録「田植踊唄」の演目「お正月」を中心とした内容、さらには平成28年6月16日以降の復活への実践活動を踏まえて、かつての谷柏田植踊の実態やその復活から何が学べるか、今後の課題、等を考察してみることとする。

(1)谷柏田植踊と近隣田植踊りとの関係

①起源の検討

伊藤慶作氏の「谷柏田植踊沿革」「谷柏田植踊のルーツと現状」には、明治に入ってから谷柏の山口円蔵氏が金瓶から習い受けたのが谷柏田植踊の端緒と記している。一方では、「明治30年、当年12歳から15歳の中川角吉、山口福蔵、横沢栄助、半田権助、小木曾文吉たちが揃い、金瓶の斎藤松助師匠より習い始める」とある。組織的な始まりは、後者の明治30年代なのであろうか。

また、高瀬助次郎氏の記録『百姓生活百年記』では、「谷柏にはまだ田植踊りがなかった時代は他村より頼んで来て踊らせたりした様だが、下谷柏で明治25、6年頃に金瓶の人から田植踊りを習ってからは何でもかんでも田植踊りであった」とある(注15)。ここでは明治25、6年頃が谷柏田植踊りの始まりとしている。

さて、歴史的に谷柏田植踊はいつ頃から存在したか、それを明確に裏付ける史料はない。近隣の田植踊りはいつ頃から存在したのか。山形市鈴川地区に伝承される山家田植踊に関しては、元禄10年(1697)から寛政4年(1792)までに記された『虚空蔵堂再建記』というものがある(注16)。この中に出羽国村山郡山家村に田植踊りが存在したことが確認できる記述がある。最も早い記録は元文2年(1737)である。

また、『谷柏村御用留帳』には「明和五戊子年 正月十六日 成澤村田植をどり」と記されている(注17)。成沢田植踊が現山形市谷柏地区に小正月の門付芸として谷柏村に巡ってきたことを示すものと考えられる。明和5年とは西暦1768年である。

同じく『谷柏村御用留帳』には、「安永三甲午年 一月廿二日 すかり田より田植踊参り候」「廿七日 萩の久保より田植踊見え候得共入不申候」とある。

「すかり田」とは現上山市狸森須刈田と思われる。「萩の久保」とは現山形市門伝の「萩の窪」ではなかろうか。この両地区に田植踊りが存在し成沢田植踊と同じく谷柏村にて門付芸を披露しようとしている様子が知れる。このように安永3年(1774)頃に山形周辺の村々に田植踊団体が存在したことが確認できる。

西山形田植踊は『柏倉田植踊 前口上 御唄綴』によれば、宝暦3年(1753)に村山地方が旱魃で苦しんでいるときに踊り始めたという(注18)。

以上のように、谷柏近隣の田植踊りは1700年代中期には成立しているようである。新田開発が進んで水田稲作が広がり盛んとなった時期と重なっているのは当然のことであろう。谷柏田植踊はこれら近隣の田植踊りよりも遅れて開始されたことは確かであろう。早くても江戸時代後期あるいは末期ということが考えられる。伊藤慶作氏の

記録内容と谷柏田植踊の起源が必ずしも一致するとはいえまいだろう。明治25、6年、または明治30年代というのは、一度中断したのち再開した年代ということもありうる。

②伝播経路の検討

伊藤慶作氏の記録には、田植踊りは「上山市金生で約300年前から行われており、これが旧堀田村（上山市）金瓶に移り、約130年前に谷柏でも受け入れて伝承したようである」とある。また、武田幸恵氏の記録にも「百年くらい前に、近くの『金瓶』という村から伝わったものだ。斎藤松助さんという人が教えてくれたらしい。伝承経路は、金生から成沢へ、成沢から金瓶へ、金瓶から下谷柏へという順序だ」とある。

ところで、金生田植踊の起源が「延宝6年(1678年)」とされており、その根拠は『上山見聞随筆』に記された芸能に求められている^(注19)。その芸能とは「田楽躍」である。しかし、筆者は以前に「田楽躍」は田植踊りの芸能と異なるので、この記述をもって金生田植踊の発生起源とするには検討を要するべきであることを述べた^(注20)。したがって、金生田植踊が成沢に伝播して成沢田植踊が生まれたとされる時代や背景も検討されなければならない。そのみならず、成沢から金瓶、そして谷柏への伝播経路の問題も同時に考え直す必要もあろうかと思われる。

一方、田植踊りが金瓶から谷柏に伝えられたということについて、元来成沢から谷柏に伝えられた田植踊りが一度途絶えて、その後金瓶から谷柏にもたらされたものであるとの可能性も検討する必要があると考えられる。先ほど述べた「再開年代」とは、こうした可能性を踏まえてのことである。

(2)「突き棒系」に属する谷柏田植踊

谷柏田植踊は、山形県内ではどのような形態・系譜に属する田植踊りなのであるかを理解しておく必要がある。山形県内の田植踊りは大きく以下の2つの系統に分けることが可能である。両系統が混在している両系型もわずかに存在する。

①突き棒系田植踊り

田植踊りの前列では男衆が木製の棒を持って踊り、後列では女衆を表す早乙女数人が踊る。この系統には「中太鼓」（団体によっては「団扇太鼓」といわれる1人が男衆の中央で踊る場合と「中太鼓」がない場合の2種がある。

この系統では、前列にいる2人が片手に1本の棒を持ってさかんに地面に突き立て（または突き立てるような所作を演じ）、左右上下に振り回しながら踊る。この棒の先端近くにはいくつかの鉄輪が付き、長い馬の尻毛も垂れている。振るたびに毛はなびき、鉄輪は金属音を奏でる。この棒は各団体によって長さがまちまちであり、村山地方は長目が多く最上地方は比較的短い。この棒は山形県の田植踊りを特徴づける持ち物といえる。

この棒は、これまでは「テデ棒」「テーテ棒」などと呼ばれていた。筆者は、この名称を「突き棒」と改めるべきであることを提唱している。このことについては後段(3)の⑦で触れることにする。

②弥重郎系田植踊り

この田植踊りでは、前列に大型の仮面を被る1人から3人の「弥重郎」が登場する。後方で早乙女数人が踊るのは突き棒系と同じである。なかには「弥重郎」と「突き棒」が一緒に踊る両系融合型も2団体存在する。現在弥重郎系田植踊りは山形県内では8

団体を数える。なぜか西村山地方に多くみられるのが特徴である。宮城県内にもこの系統の田植踊りがいくつか存在し、「弥十郎」と書いて「やんじゅうろう」と呼んでいる。ただし仮面は被らず頭巾を被る。

③谷柏田植踊の突き棒系所属の確認

これまで見たとおり、明らかに谷柏田植踊りは「突き棒系」の田植踊りである。前列に男衆を表す3人が登場する。いずれも陣羽織を着て、手甲や股引に脚絆を身につけ、足には草鞋をはく。頭には鉢巻きを着用して激しい踊りに備える。3人の中央は「中太鼓」役で、腹に小太鼓（長さ24cm・直径19cm）をかかえ、細いバチ（長さ41cm）でそれを打つ所作や、交互にバチを上方に掲げてクルクル巧みに回す演技を繰り返す。

中太鼓の脇では、同じく男衆を表す2人が「源内棒」（長さ80cm）という木製の棒を片手に持って踊る。源内棒の先端近くには3個から5個の鉄輪がつき、さらに馬の黒い毛が付着している。それをさかんに地面に突き立てたり、左右上下に力強く振り回す。そのたびに鉄輪は金属音を響かせて、まるで楽器のようである。

後列では女衆を表す早乙女5人が赤色がかった鮮やかな着物姿で踊る。両手には採り物として裏表が金銀に染め上げられた扇子を持ち、腰を幾分折り曲げながら扇子とともに左右に動かし、また膝を屈伸させながら扇子を斜め上下に振って優雅に踊る。谷柏田植踊では早乙女の持ち物は、現在は扇子とササラが残されているが、他団体では曲目によってさらに持ち物を替える場合がある。

④谷柏田植踊とエリアを同じくする山形市内近隣の田植踊

谷柏田植踊の8人の踊り手の姿をおおよそ描いてみたが、これは山形市域に見られる田植踊りの典型的な型・スタイルである。山家田植踊・成沢田植踊・西山形田植踊（かつての柏倉田植踊）などに見られる共通の型であり、これが上山市の金生田植踊やさらに白鷹町の畔藤田植踊へと、置賜地方を含む山形県の南部方向に続く型として注目される。

一方、山形市以北から最上郡の田植踊りは、この型ではなく前列の中太鼓の存在はまったくみられず、突き棒を持つ男衆が動き回る。共通するのは、後列に早乙女数人が位置をほとんど変えずに持ち物を手に取りながら踊り続けることである。

(3)活字記録から浮かび上がるもの・学ぶもの

①村人たちが待ちわびる娯楽芸能

伊藤慶作氏の記録からは、村人たちが娯楽として待ちわびる田植踊りおよび狂言もつ大きな役割が浮かび上がる。明治30年に田植踊りを構成したメンバーは、「狂言も習いレパートリーも広く、那須与一・定九郎・鳥さし舞・おかめなどなど習得し、旧2月1日の甲箭神社の鎮守神の祭礼に神事舞として奉納した」とある。先の高瀬助次郎氏の『百姓生活百年記』にも、「田植踊りの他に茶番狂言と云う一種独特の百姓達が編み出した芝居があった。茶番狂言は山形の『いたかかぐら』から習ったという。下谷柏の田植踊りの得意の狂言は、義経千本桜であって見物人をよく笑わせていた」と記されている。ここでいう「狂言」とは、地芝居や滑稽もの・大衆芸能など、面白可笑しい素人芝居の組み合わせである。

本来、稲作信仰に根ざす田植踊りの芸能が、一方では村人の娯楽として受け入れられていく側面も併せ持ち、さらに付随する狂言が一層その傾向を強めていった。田植踊りと狂言の組み合わせは、下谷柏のみならず他地域の多くの田植踊りにもみられ、

いよいよ娯楽化されて村々を興行して回ったことはよく知られている事実である。田植踊りの果す役割が少なくなかったことがわかる。

豊作祈願の信仰心、あるいは踊りの娯楽性が失われている現代において、今後田植踊りはどういうものに依拠して存続していくことができるのか、そのことについては後段で触れることにする。

②戦争は文化を破壊する

伊藤慶作氏の記録には、「満州事変に続いて支那事変勃発、日中戦争、満州開拓移民、昭和16年には太平洋戦争へと拡大し、男子は戦場へ送られて若者がいなくなり、残るは老人・女衆となった。谷柏田植踊りは中断の止む無きに至った」とある。その後も「若者は戦地に赴き衣裳もばらばらになってしまった」「戦争は熾烈となり銃後の守りも険しく、芸能を顧みる余裕などは全くなくなってしまった。ついに昭和20年8月15日終戦となり、若者の多くは戦場の露と消えて帰らず、古老老師も小木曾文吉氏のみとなった」と記されている。

いうまでもないが、戦争は文化をことごとく破壊する。全国的に名の知れた文化財だけではない。先に記したとおり、村人が鎮守の神の祭日や興行などで楽しんでいた田植踊り、この小さな地域文化までも破壊する。現代においても、地域紛争を含めて、世界の貴重な文化財（遺産）がいつも簡単に消失していく現実が後を絶たない。何げない平和な日々がとても大切であることが、この谷柏田植踊りの歴史の中に如実に示されている。

③田植踊り継続への決意と実践行動

戦時中、谷柏田植踊りの継続を提案し、協力に後押しをしてくれた方々が地域社会に存在したこと、それに応えるかたちで、戦地に赴いた男性に代わって女性・婦人たちが立ち上がり、田植踊りを踊ったこと、どちらが欠けてもいけないこれら双方の熱意・決意が結実したことは特筆すべきことである。伊藤慶作氏の記録には、そのときの経緯がみごとに再現されている。それは大変感動的な場面でもある。この決意と立ち上げがなければ、戦後も谷柏田植踊りは復活できなかったであろう。この立ち上げも、戦争がひどくなって一時中断するものの、昭和24年に婦人班長を中心に20数人で再結成されたことは、その後の伊藤氏の記録に記されているとおりである。

④女性・婦人たちの大いなる功績

前述の武田幸恵氏の文章には、女性たちの功績を讃える部分があった。武田氏が感謝の気持ちを持つにいたった「おばあちゃんたち」は、戦中、戦後の中断した谷柏田植踊りを再興した女性・婦人たちである。女性が田植踊りを男性から引き継いで踊った事例は、山形県内の歴史では明確にはわからない。

現在女性だけで構成される田植踊りは、鮭川村の「段ノ下田植踊り」だけである。現地での聞き取り調査によれば、以前から女性のみで始められたと伝承されているが、はたしてどうか。全国的にみても民俗芸能はほとんどが男性によって演じられている。そこには神仏を前にしたケガレの問題が横たわっている。女性が始めから関わることは不可能な時代が長く続いた。したがって、「段ノ下田植踊り」も、いつの時点か女性から男性にとって替わられたのではないと考えられるのである。

そういう状況のなかで、谷柏田植踊りの場合、危機的場面において女性が民俗芸能を継承して回避した事例として歴史に残るものと思われる。

⑤もう一つの谷柏田植踊の存在＝台谷柏田植踊はあったか

伊藤慶作氏の文章には、台谷柏に田植踊りがあったことが事もなげに書かれており、見逃してしまいがちである。もし「台谷柏田植踊」の存在が事実であれば、同じ谷柏の集落に接近して2つの田植踊りがあったことになる。しかしこのことの記憶は、谷柏地区の人々にはほぼない。この件については、今後調査を継続するなかでの検討課題としておきたい。

⑥時代に合わせた変容

伊藤慶作氏の記録には、最初に田植踊りが始められた明治30年に「陰役」として三味線と笛があったことがわかる。具体的には次のように記している。

源内棒＝中川留吉・山口福蔵、中太鼓＝小木曾文吉、早乙女＝横沢栄吉ほか3名、唄・太鼓＝半田権助、陰役（三味線・笛）＝伊藤金太郎・伊藤ナカ・伊藤甚作・会田弥平治・吉田三右エ門など。

このように、現在も続く唄・太鼓の役割のほかに、当初は三味線と笛の役割が少なくとも5名いたのである。その後、昭和4年以降の記録から三味線と笛の役割は消えている。近くの西山形田植踊にも三味線はない。しかし、かつて役割としてあったと考えられる笛と鉦の現物が残されている。一方、上山市金生田植踊には、現在も唄・太鼓・三味線・笛が伴っている。各田植踊り団体によって、これら囃し手は様々な構成からなり、結成当初は多彩さを保持していたものの、時代の変遷とともに構成メンバーの不足などで欠員が生じ、やがて消失していったものも多いと考えられる。後継者難の現在では、最低限の囃し手の構成となっている団体が多いのではないかと想定される。踊り手についてもそうであろう。時代に合わせて柔軟に変容させながら危機を乗り越えていこうとする姿勢もみえる。当初からすれば不十分な体制であっても、伝承そのものを維持するための方策とみたい。

⑦早乙女構成の疑問

伊藤氏の記録によれば、田植踊りを編成した明治30年、大正3年、昭和4年、昭和24年、昭和47年のいずれにおいて、早乙女は4人で構成されていることがわかる。昭和54年に南山形小学校生徒へ伝承した時点でも早乙女は4人である。現在残っている早乙女衣裳は4人分が揃っていて、同型・同色のものである。

しかし、早乙女が着用する前掛けには「谷」「柏」「田」「植」「踊」の文字が書かれていて5着が揃っている。地域の人々の記憶では早乙女は5人いたとの話もある。この前掛けが表しているように、早乙女が5人構成となった時期があったのではないかとと思われる。それはずっと後のことなのかどうか、このことも検討課題としたい。

⑧地域名称の大切さ＝「源内棒」から「テーテーボー」(テーテツキ)への変更をめぐる

伊藤氏の記録で、平成7年のものには「源内棒」とあったが、平成17年記録には「テーテーボー」と変更されている（武田幸恵氏の記録には「テーテツキ」とある）。この経緯について考えてみたい。昭和37年頃に丹野正先生の指導を受けたことが伊藤氏の記録の中に記されている。丹野先生は「源内棒」を「テデ棒」ないしは「テーテ棒」と呼んでいたはずである。なぜならば、当時丹野先生は山形県文化財保護審議委員を務められており、その関係で県教育委員会等が発刊する民俗芸能報告書の類いには、すべて「テデ棒」「テーテ棒」と記されているのである（注21）。その影響もあって、

伊藤氏は「源内棒」から「テーテーボウ」に書き換えたのではないかと推測される。しかし、山形県全体の見地に立てば、「テーテーボウ」、あるいは「テデ棒」「テーテ棒」の呼称はむしろ地域的に限られており、一般名称として使用するには相応しくない。筆者はその名称は改めるべきであることをすでに問題提起している（注22）。

田植踊に関連するものだけでなく、方言なども含めた民俗文化財について、地域に根付いた名称・表現は後世まで大切に残していくべきであるというのが筆者の考えである。たとえ「地域語彙」は「共通（一般）語彙」と並記させて残すという方法もあるだろう。

(4)田植踊復活にあたって学ぶこと

①復活可能な撮り方の映像の存在

谷柏田植踊りを復活するにあたって、直接指導できる経験者がまったく存在しない中で、VHSビデオがきちんと残されていた意義はじつに大きい。しかも、寄せ太鼓、源内棒・中太鼓・早乙女の踊り、歌、陰太鼓など、パートごとに撮影されていて、それを手本とできる映像であったことである。むろん、手本とする場合は映像が反対の所作として映るので、それを覚えるにはかなりの難儀さが伴う。しかし単に舞台公演の映像ではなかったことは、このたびのように踊りを復活・復元するにきわめて有効であることが確認された。すべての芸能保存団体には、このことを今のうちから実現しておくべきであることを訴えたい。

②衣裳・道具類の保存

復活しようとしても、かつて使用した衣裳や道具類が紛失や破損していれば、かなりの困難が伴う。ほとんど断念せざるを得ない心境になるだろう。今となっては同じものを補充・購入することが難しいことがほとんどであるからである。

谷柏田植踊の場合、かつて使用したものが下谷柏公民館に紛失することなくまともに大切に保存されていたのは幸運としかいいようがない。地域の方々のいき届いた配慮が伝わってくる。（衣裳にはこまめな女性たちに受け継がれていたお陰であろうか。）

踊り手の着物・帯はもちろん、草鞋・手甲・脚絆・扇子、用具等も丁寧にたたんだり袋に包んで茶箱に入れられていた。虫食いやカビなどほとんどみられない良好な状態で保存されていたことは特筆すべきことである。中断・廃絶が長く続けば続くほど、衣裳や道具類は散逸してしまう可能性が高くなり、それが復活を妨げる原因の一つとなる。このことを肝に銘じるべきだろう。

③詳細な活字記録の保存

伊藤慶作氏の「谷柏田植踊沿革」「谷柏田植踊のルーツと現状」や「田植踊唄」などの記録は、ビデオとともに田植踊りを復活してみようとする人々の意欲を一方で支えてくれるものである。谷柏田植踊の発祥にまつわる歴史や先人の継承への苦難のあゆみなどを知ることができる。それは、復活への意欲を燃やし続けることや、途中でじけそうになる心を奮い立たせてくれるものとなる。

④地域社会の合意形成と協力・支援体制の基盤づくり

先に述べたとおり、谷柏田植踊の復活・継承は、東北文教大学・南山形地区創生プロジェクト委員会が取り組む「未来に伝える山形の宝」事業の一環として進められている。実践プランが5つある中で、そのうちの第5プランとして位置づけられている

ものである。例えば、この事業を推進する母体としてのプロジェクト委員会やその他の実践プランがなく、たんに「谷柏田植踊の復活」の単独の取り組みであれば、順調にここまで歩むことが出来たかどうか疑問である。そもそも田植踊りチームを構成することが困難であったかも知れない。母体結成と各実践プラン承認という大学と南山形地区との合意形成があったからこそ、復活への取り組みがスムーズにいったものと考えられる。

このように考えれば、田植踊りという地域の伝承文化の復活とは、一部の意欲ある人々の取り組みだけではきわめて困難を伴うこと、その前提となる地域社会の合意形成や一定の協力・支援体制の基盤が作られてこそ、スムーズに復活に向けて動き出すことが可能となるのだということを学んだのである。

(5)谷柏田植踊の今後について＝伝承活動の継続性をどう保つか

①地域での伝承活動

谷柏地区において谷柏田植踊がなぜ引き継がれなかったのか。かつて継承していた方々が高齢化していき、引き継ぎ手なないままに中断の止む無きに至った、というのが実態であろう。伊藤慶作氏は平成8年(1996)において、「後継者に悩む谷柏田植踊」と題して手記を著している。そこでは「若いものでも65歳と老齢化している」と嘆いている(注23)。後継者は何故生まれなかったかの問題について、そこには様々な要因が重なり合っていることは容易に想像される。いうまでもないが、このことは谷柏地区の問題に限ったことではない。

谷柏地区は最初に触れたとおり、西方から上谷柏・中谷柏・台谷柏・下谷柏の順に細長く続く集落である。当然ながら4集落それぞれの歴史と事情をかかえている。最も離れた上谷柏に住む人のなかには、谷柏田植踊が存在したことを知らない方々もいた。また知っている方々でも、田植踊りは「下谷柏」の田植踊りであるとの認識が強くあったということも事実なのである。谷柏田植踊は、谷柏地区全体のものではなく、「下谷柏」のみの芸能に限定されていたという側面が垣間見える(注24)。

民俗芸能によくある話しであるが、下谷柏のように地区内の狭い集落のみで継承されている場合、さらにその集落の長男のみに継承されるのを原則としているような場合において、後継者難に陥った際にはそれが障壁となって、いっそうの困難さが待ち受けていることが多々ある。

これからは、そういう伝統的な継承や伝承の枠組み・仕組みを一旦壊し、旧来の原則やルール等を大胆に外しながら、老若男女を問わず広域的な後継者募集や育成を試みていかなければいけない。そうでなければ、地域文化の存続自体が危うい時代であるということを胸に刻む必要がある。

②子どもへの伝承活動

伊藤慶作氏の記録にも克明に記されているように、当時南山形小学校6年生担任の今田範子先生が谷柏田植踊を子どもたちに伝承させようと、保存会長である伊藤氏宅にお願いの訪問をしている。今田氏によれば、小学校の学芸会で演じさせようと考えていたということである(注25)。これを機に、昭和54年以降20年近くは子どもたちへの伝承活動が活発に行われていたのである。しかし現在ではまったく行われなくなっている。さらに、第九中学校においても前述のように田植踊りの伝習活動が行われていることが伊藤氏の記録に記されている。

一時期、南山形小学校を主とした地域の子どもたちへの伝承活動は盛んであった。田植踊りの「おばあちゃん」たちは、下谷柏公民館に小学生を迎え、時には直接学校にも出向いて、子どもたちに手取り足取り教えてくれたのである。

子どもたちへ地域の伝承文化を体ごと体験させることの意義は少なくない。武田幸恵氏の文には、田植踊りを通して地域の歴史文化を理解することができ、稲作の豊作への祈りや願いの心を知り、また田植踊りを継承してきた人々、「おばあちゃん」たちへの感謝と共感の気持ちを持つことができたことが述べられている。教科書だけでは学べない大切なことがらが田植踊りの伝承活動から学べる良き事例といえる。

しかし、その伝承活動は学校では行われなくなり、その後下谷柏の地域の子どもだけでいくらか活動は続いたとみられるが、それも残念ながら現在では途絶えた状況にある（注26）。そこには学校側の取り組み意欲や継承体制の問題も潜んでいるように思われる。いずれにしても、どうして今に続かなかったのかの検証も必要である。また、小中学生の田植踊り経験者のなかで、谷柏田植踊の後継者としてそれを受け継ぐきっかけやチャンスは本当になかったのか、そのあたりも今後明らかにされなければならない。

逆の事例として、山形市立鈴川小学校において、地元の山家田植踊の伝承活動はなんと昭和40年から途切れることなく現在も継続されている。代々、学校としての引継ぎ体制が確立されているようである（注27）。南山形小学校や谷柏地区において、再び子どもたちへの伝承活動を始めることができるようになるには何が必要なのか。このことを地域全体の問題として考えていく姿勢がいま求められている。

③学生「学びの場」「地域貢献」としての伝承活動

東北文教大学の学生はボランティアで田植踊りに参加している。大変意欲的な学生たちであり、先にみたようにビデオやDVDを見ながら個人的にレッスンを重ね、夏休みにも自主的に教室に集まって練習に励んだ。この過程で学生たちが学んだものは、おそらく少なくないだろう。地域の方々と連携し、一致協力して物事を成し遂げることの大切さと喜びは、教室や学生どうしの体験だけでは得られない貴重な学びであったはずである。一例ではあるが、踊りに必要な着物の着付けやたたみ方、脚絆や手甲の付け方、ワラジの履き方まで習得できたことは文化的体験として得難いものだったろう。学生たちは復活活動を通して、何がしか地域貢献ができたのではないかと、一定の達成感を覚えながら語っている。

しかし、学生はやがて卒業をむかえる。田植踊りが次の学生へと途絶えることなく継承されていく仕組みと体制が必要である。一過性の発表で終了となればことは簡単であるが、そうではなく継続性が要求されるものであり、現実問題として大変難しさを抱えている。プロジェクトは5年間継続されるが、終了した場合も地域の方々と一丸となって継承していくことが求められるだろう。それにはどういう方法があるのか。学生による継続・持続性を考えた場合、「サークル」結成という方法も考えられる。このことについては、今後真剣に学生や大学側と議論・協議を積み重ねていかなければならない。取りあえず現体制を維持し、当面は地域の方々を含め各チームの所属メンバーに継続していってもらわなければならない。

④伝承文化・民俗芸能への今日的価値づけ・意義付け

先に田植踊りの「信仰と娯楽の両面性」について述べた中で、谷柏田植踊やその他の田植踊りでは狂言を取り入れて、一層娯楽性を強めていったことに触れた。この芸

能は、このような経緯で村人たちに受容されていった歴史があることを見据える必要がある。

現在の田植踊りでは、一部に「鳥刺し舞」などは残っているものの、狂言はほとんど行われていない。田植踊りそのものに、本来娯楽性はほとんどなく、先の「田植踊唄」の記録をみれば、田の神に豊作を祈願する強い信仰心に裏打ちされた芸能であることが理解できる。

田植踊りは予祝の芸能といわれ、1年の始まり（小正月）に、その年は豊作であることを「予め祝う」のである。そうすることによって、人々の願いを神々に受け止めていただき、豊作になることを約束してもらう。それは冷害に苦しんだ雪国ならではの切実な祈りの芸能なのであった。

そこで、「飽食」といわれる現代において、田植踊りを踊ることの意味は何か。田植踊りの切実さや信仰心の喪失はもちろん、娯楽性などはほとんど失われている。そういう現代において、田植踊りを演ずること舞うことにあらたな意義を見出し、そこに価値づけがなされなければならないことは、もはや自明である。たんに「歴史的に古い」から守るのだ、というだけでは意味をなさない。

例えば、田植踊りなど地域の伝承文化をみんなで守り、体現することによって、生活共同体としてのまとまりや絆を再構築する。そのことが地域社会の活力や子どもの健全育成に欠くことができない、というような価値づけも可能であろう。あるいは、いつ食糧難がおきるかわからない。食べることの有り難さを思い、それをもたらしてくれる自然の偉大な力に対して畏敬の念をもつ必要がある、田植踊りを踊る意味はそこにある、などと意義づけることもできよう。

このように田植踊りに限らず、地域文化に対して今日的な意義や価値を新たに付与することが今求められている。伝承文化の継承にあたり、このことをしっかりと議論して共通理解をはかりながら対応していくことが必要とされている。

まとめ

これまで考察した項目ごとに、どのような内容を検討したか、学ぶべきものは何か、何を今後の課題としたか、等を簡潔にまとめてみることにする。

(1) 谷柏田植踊と近隣田植踊りとの関係

- ① 谷柏田植踊の起源に関する伝承について、周辺の田植踊りの起源をめぐる歴史史料と突き合わせて検討してみた。まだまだその起源について検討する余地があることを述べた。
- ② 谷柏田植踊の伝播経路に関する伝承について、同じく周辺の田植踊りの伝播経路を踏まえて検討してみた。今後さらに検討すべき余地が残されていることを述べた。

(2) 「突き棒系」に属する谷柏田植踊

- ① 山形県内の田植踊りの中で「突き棒系田植踊り」の特徴点を確認した。
- ② 同じく「弥重郎系田植踊り」の特徴点を確認した。
- ③ 上記①②を踏まえて、谷柏田植踊は「突き棒系」に属することを検証・確認した。
- ④ 谷柏田植踊とエリアを同じくする山形市内近隣の田植踊の特徴点を確認し、その

中での谷柏田植踊りの位置づけをはかった。

(3)活字記録から浮かび上がるもの

- ①田植踊りは村人たちが待ちわびる娯楽・芸能の役割をはたしていたことが浮き彫りになった。
- ②戦争は田植踊りのような村の小さな地域文化をも破壊する。日常の平和な暮らしを守ることが何よりも大切であることを谷柏田植踊の歴史は示している。
- ③中断した田植踊りを継続することへの熱意と決意が谷柏の地域社会にあったことを知ることができる。
- ④谷柏地区の女性・婦人たちには、田植踊り復活に大なる功績があったことが確認できた。
- ⑤記録によって谷柏田植踊以外にも「台谷柏田植踊」はあったことが判明したが、その存在についてさらなる調査・検証が必要である。
- ⑥民俗芸能・伝承文化は、時代に合わせて柔軟に変容させて危機を乗り越えていくことも必要であることを学んだ。
- ⑦早乙女の構成で、時代をつうじて4人が存在していることが記録にあるが、残された早乙女の前掛けや地域の証言で、5人が存在した時期があるかも知れないという疑問が残されている。そのことも今後の検討課題としたい。
- ⑧地域名称の大切さを教えられたのが、踊り手が持つ「源内棒」であった。「源内棒」の名称は、いつしか「テーテーボー」（またはテーテツキ）へ変更されていたが、方言と同じように、地域に根付いた土着的な名称・表現は安易に消すべきではないことを述べた。

(4)田植踊復活にあたって学ぶこと

- ①民俗芸能の復活や復元を考慮した場合、映像の存在が大切であること。
- ②衣裳・道具類の丁寧な保存も復活には欠かせない要素であること。
- ③詳細な活字記録の保存も復活への手がかかりや意欲などにつながること。
- ④谷柏田植踊の復活にあたって、「東北文教大学・南山形地区創生プロジェクト委員会」の存在など、大学組織と地域社会との合意形成と協力・支援体制の基盤づくりがきわめて重要であること。

(5)谷柏田植踊の今後について＝伝承活動の継続性をどう保つか

- ①地域での伝承活動について、谷柏田植踊がなぜ20数年も中断してしまったのか、どこでも起こりうる問題の所在をつぶさに検証していくことが今後の継承活動に大切であることを述べた。
- ②子どもへの伝承活動について、今後復活するにあたってなぜ南山形小学校で継承が途絶えたのか、地域での継承活動はどうだったのか等を振り返り、今後は地域全体の問題として考えていく姿勢が必要であることを述べた。
- ③東北文教大学の学生は、谷柏田植踊り復活活動において、教室やキャンパス内だけでは得られないものを学んだはずである。これからも地域から学ぶ、地域で学ぶことが大切であり、それが地域貢献にもつながるであろうことを述べた。
- ④今後、伝承文化・民俗芸能はなぜ今必要なのかということについて、あらたに今日的な価値づけや意義づけをはかって、その必要性を再確認することが求められていることを述べた。

おわりに

学生が地域の方々と一体となって積極的に活動に取り組む、ということの重要性はいうまでもない。本稿では谷柏田植踊という中断した民俗芸能を学生と地域在住者がタッグを組んで復活したことを基本に、そこから学ぶべきことがら、さまざまな今後の課題などを論じたつもりである。学生と地域在住者が一致協力して一つの芸能を復活させたことは、いままでに経験したことのなかったことであり、おそらく希有な試みであると思われる。試みは今後どう展開していくのか。ともあれ、すでに動き出した。これからは正念場という気構えで、学生の学びのため、地域の発展のため、みんなで力を合わせて様々な困難に立ち向かっていきたいと考えている。

最後となったが、谷柏田植踊保存会長の枝松昭雄氏や元南山形小学校教諭の今田範子先生をはじめ南山形地区の方々には、かつての谷柏田植踊の実態や子どもの継承活動などの聞き取り調査では大変お世話になった。また、本文中にお名前を記させていただいたが、田植踊りの踊り手や囃し手を担っていただいた地域の方々には、ご多忙中も練習にお励みいただき、また学生へのご指導もいただいた。中川藤子氏には舞台裏での着付け指導を行っていただいた。以上の方々に対して、ここに記して厚く御礼を申し上げる。

[引用文献]

- 注1. 渡辺信三『南山形郷土史探訪』南山形地区振興協議会 南山形郷土史研究会 1989年
『山形県の地名』日本歴史地名大系6 平凡社 1990年
- 注2. 各県の民俗芸能緊急調査報告書『岩手県の民俗芸能』(岩手県教育委員会 1997年)
『宮城県の民俗芸能』(宮城県教育委員会 1993年)『福島県の民俗芸能』(福島県教育委員会 1991年)に基づいている。
- 注3. 江戸時代の青森県南部地方には田植踊り(八戸田植踊など)があったが、現在はみられない。下北方面の「田植え餅搗き踊り」や八戸市を中心とした「えんぶり」の芸能は、本論でいう田植踊りではない。また津軽地方にも田植踊りは伝承されていない。このことは、拙稿「菅江真澄の『八戸田植踊』と豊作祈願の芸能」(『真澄学』第6号 東北芸術工科大学東北文化研究センター 2011年)で明らかにしている。
- 注4. 仙北市の「生保内田植え踊り」は秋田県唯一の田植踊りとみられがちであるが、『秋田県の民俗芸能』(秋田県教育委員会 1993年)などによれば、岩手県から伝播した田植踊り歌に田植作業を演じる振り付けを加えたものである。これは「田遊び」に属する芸能であって、本論で取りあげる田植踊りには属さない。
- 注5. 森口多里『岩手県民俗芸能誌』錦正社 1971年
- 注6. 懸田弘訓「福島県の民俗芸能の系譜と特色」『福島県の民俗芸能』福島県教育委員会1991年
- 注7. 千葉雄市「正月予祝の田植踊」『仙台市史』特別編6 仙台市教育委員会 1998年
- 注8. 沼田愛「田植踊イメージの再検討」『民俗芸能研究』第55号 民俗芸能学会

2013年

- 注9. 丹野正「山形県の民俗芸能と歴史的考察」『山形県の民俗芸能総覧』山形県教育委員会 1985年
- 注10. 菊地和博「東北の田植踊りの起源伝播に係る基礎的研究 ―上山市金生田植踊り起源論を端緒として―」東北文教大学紀要 2016年
- 注11. 伊藤慶作「谷柏田植踊沿革」[平成7年12月20日記（79歳）] 私家版 1995年
- 注12. 伊藤慶作「谷柏田植踊のルーツと現状」『南山形長寿会 五十周年記念誌』南山形長寿会連合会 2001年
- 注13. 武田幸恵「谷柏田植踊り」『新版 中学国語 2』教育出版株式会社 1986年
- 注14. 「田植踊唄」谷柏田植踊保存会 私家版 1968年
- 注15. 高瀬助次郎『百姓生活百年記』巻壺 原人舎 2014年
- 注16. 「虚空蔵堂再建記」『山形市史編集資料』第16号所収 山形市史編集委員会 1969年
- 注17. 『谷柏村御用留帳』郷土研究叢書資料編第2輯 山形県郷土研究会 1942年
- 注18. 『柏倉田植踊 前口上 御唄綴』西山形田植踊保存会 1989年書き改め
- 注19. 菅沼定昭『上山見聞随筆』上山文化財調査会 1964年
- 注20. 前掲菊地和博「東北の田植踊りの起源伝播に係る基礎的研究 ―上山市金生田植踊り起源論を端緒として―」
- 注21. たとえば、『山形県の民俗芸能 第一篇』山形県文化財保護協会 1961年、『山形県の民俗芸能総覧』山形県教育委員会 1985年、『山形県の民俗芸能』山形県教育委員会 1995年などにみられる。
- 注22. 前掲菊地和博「東北の田植踊りの起源伝播に係る基礎的研究 ―上山市金生田植踊り起源論を端緒として―」
- 注23. 伊藤慶作「後継者に悩む谷柏田植踊」『終戦五十年記念誌 激動の昭和 私たちはこう生き抜いた』南山形地区長寿会連合会 1996年
- 注24. 現谷柏田植踊保存会長の枝松昭雄氏からお話をうかがって感じたことである。
- 注25. 前南山形小学校教諭であった今田範子氏からお話をうかがった。
- 注26. 前掲の伊藤慶作氏の「後継者に悩む谷柏田植踊」には、「現在も下谷柏の小学生4年以上の子どもに教えているが、やがて中学生になると受験のため敬遠され、就職の年頃になると地区を離れるものも多く、折角の伝承活動も定着しない」と記されている。
- 注27. かつて鈴川小学校教諭として勤務されていた伊藤哲雄氏（現谷柏田植踊唄の担当者）のご教示による。

[復活への取り組み]

1. 東北文教大学での最初の田植踊り学習会 (平成28年6月16日)



2. ビデオを唯一手本にした東北文教大学教室での練習 (平成28年7月12日)



3. 南山形地区の下谷柏公民館での第2回目合同練習 (平成28年8月25日)



4. 東北文教大学「文教祭」での初披露 (平成28年10月9日)



[かつての谷柏田植踊]

昭和56、7年頃の谷柏田植踊を演じる女性たち

